

2019 年度 HICARE/IAEA インターンシップ報告書

広島大学医学部医学科 4 年生

小野 彩佳

1. 概要

2. インターンシップの内容

- 1) Borderline resectable pancreatic cancer に関する論文執筆
- 2) 福島県立医科大学での Technical Meeting に向けての準備作業とそれに伴い

出版されるブックレットの作成

- i. 今までに出版された Handbook 等による勉強
- ii. 会議参加者のデータ作成

iii. プログラム作成

iv. 会議後に配布されるアンケートの日本語訳/データ作業

v. 福島県で発行されている住民向けの冊子の英語訳

vi. Technical Meeting に伴い出版されるブックレットの作成

3) Interns' forum における発表

3. 他国から来たインターン生や職員の方との交流から得たもの

4. 謝辞

1. 概要

期間：2019年4月1日～2019年6月28日

派遣元：放射線被曝者医療国際協力推進協議会(HICARE)

派遣先：国際原子力機関(International Atomic Energy Agency : IAEA)

配属部署：核科学・応用局(Department of Nuclear Sciences and Applications)

ヒューマンヘルス部(Division of Human Health)

Director's office

派遣目的：グローバルな視点から被ばく者医療の意義と必要性を理解し、広島
の有する被ばく者医療の実績と研究の成果を継承する人材を育成すること

私は、HICAREの推薦と支援のもと、広島大学医学部医学科4年時に医学研究
実習の期間として与えられる4か月を利用して、オーストリアのウィーンにあ
るIAEAでインターン生として様々な経験をさせていただきました。

広島県出身ということもあり、小学校から高校まで毎年原爆について学習し、

現在は医学生として放射線治療について学び、核の平和利用には大変関心がありました。 また、幼少期に約 3 年間米国に住んでいた時、原爆に対する様々な考え方があることを知り、核について他国にはどのような考えの人がいるのかさらに知りたい、自分が広島で学んだことを伝えたい、と思いました。 そのため、国連機関の一つで様々な国の人が原子力に何らかの形で携わりながら働いている IAEA でのインターンシップがあることを知り、貴重な体験になると考え、本インターンシップに応募しました。

インターンシップ中は、様々な方に助けをもらいながら多くの業務にかかわることができました。 詳細について以下に述べます。

2. インターンシップの内容

IAEA では、Director's office に配属され、Human Health 部の Director である

May Abdel Wahab 氏の指導のもと、論文を執筆する業務を行いました。

また、それと同時に Uwe Scholz 氏の指導のもと、2019 年 5 月末に福島県立医

科大学にて IAEA と福島県立医科大学の共催で行われた会議に向けての準備や

その後の本の作成にあたりました。

Interns' forum というインターン生の発表の場で、発表し議論するという貴重な

経験もしました。



(写真 : Human Health 部の Director である May 氏 と)

1) Borderline resectable pancreatic cancer に関する論文執筆

最初の週に Director である May 氏と面談を行い、このインターンを通して

Borderline resectable pancreatic cancer(切除不能境界膵臓癌)に対する 4 つの治

療法の比較に関する論文の執筆を依頼されました。4つの治療法とは、手術のみ、術前化学療法、術前化学放射線療法、そしてSBRT(定位放射線治療)のことです。論文を一から書くのは初めてのことであったので戸惑いましたが、



May 氏に指導してもらいながら、期間中、終始この論文に取り組みました。どのような形式の論文を用いるのか、除外基準をどうするのかという方針の立て方さえわからなかった私に、May 氏は忙しい中、丁寧に疑問の1つ1つに答えながら指導して下さいました。

具体的には、各治療法の結果についての論文を探し、引用できる論文を絞り、さらにその結果を抽出・比較するという作業を行いました。また、論文を作成するにあたり、実際のデータのみではなく、導入部分や定義、考察部分にも

引用論文が多く必要になるため、それらに使用できる論文も同時に収集するよう努めました。最初の1か月は手探りで行っていた論文検索も、次第に必要・不必要の区別ができるようになり、徐々に効率の良い方法で取り組むことができるようになりました。

帰国後、大学で行われた医学研究実習発表会に向け、広島大学放射線腫瘍学の永田靖教授や村上祐司講師にご指導いただきながら準備していく中で、さらに論文の方針が明確となり、現在は完成に向けて取り組んでいるところです。

(写真：広島大学の研究実習発表会にて)

2) 福島県立医科大学での Technical Meeting に向けての準備作業とそれに伴い出版されるブックレットの作成

2019年5月末、福島県立医科大学にて、IAEAと福島県立医科大学の共催で福島第一原子力発電所事故後の地元住民の生活や自然への影響等に関する Technical Meeting が行われました。福島県立医科大学から来られていた医学部放射線健康管理学講座助教の大葉隆先生が4月中旬で帰国されたので、その仕事を引き継ぐ形で演者の順番の決定や議事録・プログラムの作成等に携わりました。

i. 今までに出版された Handbook 等による勉強

IAEA では、過去にも福島原発事故等に関する会議を複数回行っており、それに伴い作成されたブックレットや“Health in Disasters Handbook : A Science and Technology Studies Practicum for Medical Students and Healthcare Professionals”を出版しています。実際にプロジェクトに関わるまでの間はそれらを読み、勉強して理解するように言われました。原発

事故当時、私は中学生で、テレビニュースやインターネットからの情報しか知らなかったのですが、実際に福島の病院で対応されていた大葉先生に当時のお話を伺い、与えられた冊子を読み進めていく中で、より詳細に事故当時のことを知ることができました。

私が渡された“Health in Disasters Handbook”は英文でしたが、私の先輩が以前インターン業務として日本語訳のチェックを行い、最終的には日本語版も作成されているようです。私が今回行った業務も、数年後に後輩が関わることになるのかもしれないと考えると、非常に感慨深いものがありました。

ii. 会議参加者のデータ作成

IAEA では、過去に行われた福島の原発事故に関連する会議に参加した各国の専門家のデータを集めていたので、それに前回と今回(2019年5月末)の会議の参加者のデータを加える作業を行いました。具体的には、性別や出身国・大陸別によるもの、専門としている領域、そして参加回数などです。Excel等を用いて表から図を作成したりする作業は、中学・高校の授業で学んだことはあったものの、実際に行うのは初めてで戸惑うこともありました

が、会議後収集したアンケートなどのデータがどのように使われていくのかわかることができました。また、参加者の出身背景や専門性に大きな偏りがなく、やはり圧倒的に女性の割合が少なく、まだまだ世界的に見ても女性の社会進出が十分になされているとは言えないのだということも、同じ女性として痛感しました。

IAEA から参加している参加者の出身国の内訳をどう扱うのかと尋ねたところ、「あなたたちインターン生を含め、我々IAEA 職員は IAEA から参加して何かを行う以上、自国の国民としてではなく国際機関の一員として扱われる」と言われたことは非常に印象的でした。このことにより、国際機関で働くことの実感が増し、またそのあとのインターン生としての働きに対する考え方も少し変わりました。

iii. プログラム作成

スピーチの順番や時間、各発表者の社会的背景や演目を含んだプログラムの作成を行いました。具体的には、時間の調整や各発表者の発表タイトルの

追加・変更、社会的出身背景の検索と追加、そして何度にもわたる確認作業などです。

会議には当然必要不可欠なプログラムですが、実際作ってみると議長の決定や順番に対する配慮が必要であり、また直前で演者の増減や変更もありました。

さらに、お互い母国語以外の言語である英語によるメールのみでやりとりを行う難しさを痛感するなど様々な困難がありました。修正点を何度も見直し、手を加えていく上で、第三者による見直しでないと気づけないこともあり、想像以上に時間や手間もかかりました。しかし、文面だけに依存するのではなく、直接会えなくてもインターネットを介して会議を行う重要性やその利便性に気づけたことなど、学ぶことも非常に多かったです。

また、各スピーチの間の休憩以外にも、少し長めの休憩として“Tea Break”と呼ばれるものがあることに日本との文化的な違いを感じました。

iv. 会議後に配布されるアンケートの日本語訳/データ作業

福島での会議後に配布されるアンケートの作成・編集から実際に回収された結果のデータ編集、そして英訳作業を行いました。アンケートの作成時には以前に行われた会議のものを参考にしながら、自然な日本語になるよう留意しました。また、デジタルアンケートであったため、私が Word で作成したアンケートをプログラミングの部署の方がインターネット上にあげたものの確認も行いました。この会議の準備に携わる中で、それぞれの専門家が自分の専門分野の仕事を連携して行うということを実感することが多かったです。

v. 福島県で発行されている住民向けの冊子の英語訳

専門家が集まって議論が行われる Technical Meeting の開催に際し、実際に日本で自治体等から住民に向けて配布されている冊子の英語訳を行いました。その際に、その筆者がどのような社会背景出身なのか、アドバイスとしてどのようなものがあるのかを重点的に聞かれたため、実際に住民を安心させるためにどのような対策が日本で取られているのか、そしてその情報の

信憑性を知りたいのだと考えました。この作業を通して、情報を与えられた際には、全てを鵜呑みにするのではなく、専門性があると思われる場合でも情報源を必ず確認する必要を感じました。

vi. Technical Meeting に伴い出版されるブックレットの作成

福島県立医科大学で行われた会議に際して、発表者や発表者に挙がっていたものの都合により参加できなかった様々な専門家に、福島原発事故やその後の住民生活等についてそれぞれの立場からの論文の寄稿を呼びかけ、それを元に本を作成しました。この時も英語のメールのみで期限や留意点等を伝えなければなりませんでした。また各国の祝祭日等による連絡の遅れなどに対して配慮をする必要があり、各国の締め切りに対する考え方の違いも実感し、非常に興味深い体験となりました。多くの論文が含まれた本の作成になるので、編集作業を注意深く行う必要もありました。

3) Interns' forum における発表

IAEA では Interns' forum と呼ばれるものが月に一度行われていました。これは、Human Health 部で働くインターン生と Director である May 氏、それに担当者が集まって、毎回インターン生が1人ずつ自由に発表を行い、その後に様々な議論を行う場です。6月には、月末に帰国するというので私も実際に発表を行いました。発表を行うにあたり、担当者と打ち合わせを行ったのですが、その際に広島出身ということで「原爆について学校ではどのように学ぶのか、例えば誰かが悪いなどと習うのか。」と尋ねられました。それは私にとって非常に衝撃的な質問であり、「誰が悪いという教え方はされていない。原爆による被害状況や人体に対する影響について詳しく学び、戦争は二度と繰り返してはいけないということを学ぶだけだ。」と伝えました。このやりとりをきっかけに、発表の内容を、私が生まれ育った広島についてその魅力と広島で今まで受けてきた原爆教育や学んだ原爆の被害について行うことにしました。発表の際、担当者がまず他のインターン生に「原爆についてどのように習ったか」と尋ねたところ、全員が「“原爆 - ヒロシマ・ナガサキ”という単語を習っただけ

だ」と答えていたことに非常に驚くとともに、当事者ではない国にとってはそれが当たり前なのかもしれないと感じました。

3. 他国から来たインターン生や職員の方との交流から得たもの

Human Health 部には様々な国からたくさんのインターン生が来ていました。アメリカ・スペイン・インド・メキシコなどの国からも来ていましたが、日本にいるときには詳しく学ぶ機会が少なかったせいか「遠い国」というイメージのあったナイジェリアやウクライナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、バングラデシュ等の国からも来ていました。特にボスニアやバングラデシュは紛争のイメージが強かったため、正直少し驚いてしまいました。インターン生が郷土料理を持ち寄って紹介しあい、互いの食文化を体験したり、他国の実際の様子を聞いたりすることで、互いに多くのことを知り、考えることができました。

特に印象に残っているのは、スペインのバルセロナ出身のインターン生である

Cristina にどこの国の出身か何度尋ねても、「スペイン」ではなく「バルセロナ」と必ず答えたことです。バルセロナ出身の彼女にとって、カタルーニャ地方の独立問題は非常に身近で重要な問題だったので、これは私たち広島県民にと



って非常に重要な原爆の話を、他の国では「原爆 - ヒロシマ・ナガサキ」という言葉としてだけ学んでいることと通じるものがあると感じました。当事者にとっては非常に重要なことも、国が違えば歴史上の事実や単なる時事問題に過ぎないのです。これは、IAEA に来なければここまで痛感することはできなかったと思います。また、ヨーロッパ出身のインターン生は、各国の行き来が便利なこともあり、他の国にボランティア活動に行ったりしていて、その際の体験についても聞くことができました。

IAEA 内で初めて話す際は、お互いどこの国出身かという話をするのが多かったのですが、私が日本から来たことを伝えると、必ずさらに日本のどこから来

たのか尋ねられました。日本に興味を持ってきている人が多くいること
の表れだと感じ、とても嬉しく思いました。また、日本に行ったことがあると
いう人や、いつか行ってみたい国なのだとってくれる人も多く、日本に良い
イメージを持ってきている人が多いなと感じました。特に印象的だったの
は、ボスニア出身のインターン生が「ボスニアでは日本は非常に良いイメージ
を持たれており、“日の出ずる国”と呼ばれているのだ」と翻訳機能を使いながら
教えてくれたことです。お互いに自国の話をし合う中で、日本にいた時には
意識することのなかった日本や広島、そして原爆投下に対する自分の想いを実
感することができたのも初めての経験でした。

世界各国から人が集まっている IAEA では語学に堪能な人が多く、母国語と英
語の 2 か国語はもちろん、オーストリアの公用語であるドイツ語、そしてスペ
イン語、フランス語など多言語を使いこなす人が多くいました。正直、英語
が話せるからいいかと慢心して、日常会話や挨拶程度のドイツ語さえ事前に学
ばず留学した私は、3 か国語だけではなく、さらに他の言語を学ぼうとする IAEA
の職員や他国のインターン生の積極的な姿勢にとっても刺激を受けました。特
に同じ部屋で働いていたメキシコ出身のインターン生とギリシャ出身の職員が

時々スペイン語と英語を交えて話していたことや、2人に様々な国の挨拶を教え
てもらい、また日本の挨拶を聞かれ、毎朝多言語で挨拶を交わしていたことは
非常に楽しい思い出になりました。私が大葉先生と話をしながら互いにお辞
儀をしている様子を見て、その意味を尋ねられたこともありました。日本に
いると気づかないような無意識下で行っていることも、日本以外の国の人から
見たら興味深い文化であるのだと気付かされ、その意味も考えさせられました。
IAEAでは、1階にある共用部分で定期的に様々な企画が催されており、各国の
文化を紹介したり、各部門で行なわれているプロジェクトの展示があったりし
ました。日本からも兵庫稲美少年少女合唱団による合唱や、和装での箏曲の
演奏がありました。また、世界中の料理を楽しむことができる機会もあり、
日本食は人気で早々に売り切れていました。このように、様々な国の文化を
感じることができる場が多く設けられているのは、やはりIAEAが国際機関だ
からだと思います。各国の歴史的記念日などにはそれを祝う集まりが行われ
ており、各国の文化を紹介するための集まりやフェアのようなものも度々催さ
れていました。

IAEAで実際に様々な業務を行い、特に日本とIAEAとの国際的なプロジェクト

の準備に携わった体験から学ぶことは非常に多く、日本では得られないようなとても貴重な体験となりました。しかし、私にとっては世界中から来たたくさんさんのインターン生や職員の方との交流、多文化体験を通して学び得られた生きた知識は、それと同じくらい貴重でかけがえのないものとなりました。

(写真 : Human Health 部のインターン生と IAEA にて)

4. 謝辞

今回、IAEA が実際に行っている様々なプロジェクトを知ることができ、さらに日本と合同で行っているプロジェクトに深く携わることができました。 直接携わっていなくても、他のインターン生とどのようなプロジェクトを行っているのか情報交換をしたり、日本から出向の職員がどのようなプロジェクトで来ているのか話を聞いたり、実際に職場を見せてもらったりしました。

このような多くの素晴らしい経験ができたのは、IAEA で実際に関わった職員の方々や各国のインターン生達のおかげであるのはもちろんですが、広島県庁や広島大学の方々にこのインターンシップの機会を頂き、出国準備から手厚くサポートして頂いたからです。 特に、直前にオーストリア外務省からビザ取得に必要な書類が在日オーストリア大使館に届くのが遅れ、ビザの発行が出国に間に合うかわからず不安な中、手厚くサポートして頂いたことは、感謝してもしきれません。 心より御礼申し上げます。